

「船頭町」子どもの頃の思い出

高司 良恵

(会員・佐伯市宇山)

船頭町の商店(その三)

- (1) 城下町商家の成り立ち
- (2) すっぽんたびと運動会(横丁 柴田洋品店) 談史 193号
- (3) 黒砂糖割り (新丁 平山乾物店)
- (4) 鰻さばき (新丁 黒岩飲食店) 談史 194号

(5) 散髪やさん (新丁 山城散髪や)

横丁通り・本丁通り・船の着く浜丁などに比べると、新丁通りは下町的なムードがあった様な思いがする。その新丁の下の角に山城散髪やがあった。

冬の寒い日には硝子戸がいつも蒸気で曇っていて、店の中は暖かそうでお客も朝の方が多かった。それは浦々から船が着くと浜丁から店が近くにあってので、お得意

さんも多く、繁盛していた。わたし達顔馴染の子どもが行くと、「すまんけんど、後に来てくれんかなあ。」と言われたりした。お得意のお客さん達は男の年輩者が多く、話もよく弾んでいた。

大島の漁師さんが鱒釣りの話をしていたのが、子ども心に残っている。鱒釣りの餌には「どじょう」がいいとか? 「どじょう」は堅田の人に捕ってもらおうよう頼んでいるとか、餌代は一合〇〇銭とか言っていたが、「どじょう」については、今、堅田の住人になって早五十年余になるが居を構えた頃は、田んぼの溝などには「どじょう」がたくさんいたが、農薬の関係か、さっぱり「どじょう」の姿を見る事が出来なくなってしまった。「どじょう」を捕って漁師に売る話も何度か聞いた事があるので、子ども心に残った鱒釣りの餌となる「どじょう」も何か繋がりがある様に思える。

散髪をしながら、お客さんは村の出来事、漁のことなど話してにぎやかであった。店の中には大きな鏡が二面と散髪の椅子が二つ、これは主に大人用で、子ども達の散髪はその隣に鏡と椅子があった。椅子の取り手に板を渡してその上に座った。丁度、手頃の高さになるので、

おかつぱの散髪には好都合であった。

当時、男の子は殆んど坊主刈りで、初めは丸椅子に腰かけ手動のバリカンでつんでいたが、時々しかめ面をするのはバリカンのせいであった。女の子のおかつぱは、タオルで髪をぬらし櫛を入れ、伸びた髪を整え鉢を入れる。「よつちゃんの髪は散髪やさん泣かせだ……。」といつとも言われた。直毛で硬いので、ハサミがうまく使えないらしかった。

散髪の最後の仕上げは特に念入りに切り揃え、天瓜粉をいやという程つけてくれた。目をあげると鏡に写った自分の顔が真っ白で、恥ずかしい気持ちの反面うれしい様なおもしろい様な気持ちになり、散髪やさんに行くのも楽しみの一つであった。

店の隅には籠かごと大きな釜があつて、お湯がいつも沸いていた。店の外には燃料の大鋸屑入れがあつた。向島には材木屋さん、製材所があつたので請負の人がそこからリヤカーに枠を立てて運んでいた。大鋸屑は当時の燃料としては貴重で、散髪やさん、風呂やさんに運んでいる姿をよく見かけた。

散髪を済ませさつぱりとしたお客さん達は、町の方へ

それぞれ用を足しに出かけて行つた。浜丁に船の着く頃は人の賑わいもあり、人情溢れた町であつた。

山城散髪やさんは、おじさん、おばさん、それに長男の方もしていた時もあった。おじさんは律儀な方で信望厚く又、御子息の教育には関心が深く熱心で親の期待に応えそれぞれの道に進まれた。

(6) 菊池のおばあさんとやき芋

山城散髪やさんの隣に、菊池のおばあさんがやき芋を売っていた。子ども達に人気を集めたのは、おばあさんの焼く芋は火鉢に平釜を置いて芋を輪切りにして、塩をふりまいて焼いていた。一銭で五個か六個の芋が買えたようにある。

おばあさんが蓋を取るとおいしそうな匂いがして、背伸びをして覗き込んだりした。おばあさんは芋をさわりながら焼けた芋を端に置き、又、新しい芋を並べた。やがて子どもの順番をたしかめ、新聞紙に包んでくれた。ホカホカのやき芋を片手に、いつもの遊び場に行った。カリカリと塩の粒々がとてもおいしかった。

間口の広い大きな家で土間が広かつた。二階には汽車

通学をする学生が下宿していた。

(7) 誓文払い

菊池のおばあさんの家の一隅に果物屋さんがあった。小売と卸をしていたように記憶するが、早々に店を閉じてしまった。そのお店で誓文払いがあった。二階の窓を全開にし、身を乗り出してみかんを投げつけた。大人も子どもも競って拾った。船頭町の商家では何軒か誓文払いをしていた。当日は、大人も子どももお店をまわって拾ったものだったが、戦争も厳しくなり、楽しい誓文払いの行事も行われなくなってしまった。

※誓文払い

京阪地方で十月二十日の恵比須講に、商人が京都四条京極の冠者殿(官者殿)に参詣し、一年中の商売上の虚言の罪を祓って神罰を免れようと願ったのが、後にもつばら大安売りをすることに転じ、期間も長く十月十五日から二十一日まで行うようになった。

百貨店などでは特売を行う。呉服屋で有り切れの類を見切つて売るのを夷切れえびすきという。地方によって月遅れ陰

曆など、日は一樣でない。

◎資料参考「俳句歳時記」角川書店編

山城散髪やさんの跡を尋ねてお話を聞く事ができた。現在、山城さんは常盤区の方に転居され、因尾の大友さんが所有者になり、次に現在の加納さんの持家となった。加納さんは家屋を修理改造して、小料理店を十年位したとの事で、年には勝てずお店を閉じたと話してくれた。散髪をしていた所がお店で、今はそのまま小料理店の在りし日が想像できる。加納さんも七十才を越し、古いことは記憶に薄れ忘れてしまったと繰り返し繰り返していた。だが、家があるまま残されているので子どもの頃を思い出すのには十分であった。

隣の菊池さんも城南町か池船町の方に転居、所有は安岡呉服店で倉庫兼住宅にしていたが、老朽化したので昨年取り壊し、今は駐車場になっている。がらんとした家跡は当時の面影は何もなく、丸切りのやき芋と腰の曲がったおばあさんの姿が心の中を横切り、なにかしらいとおしく思い出され、しばらく立ち止まって小春日和の空を何度も見上げた。

船頭町には京町の角に岡部散髪やさん、上本丁に神田散髪店、終戦後、下本丁の角にしのはら散髪店、明美散髪店（池辺義明さん）、浜丁、西野精米所跡に谷本散髪やさんがあったが、現在一軒も残っていない。淋しい限りである。

移りゆく時代と共に商家町並みの衰退、老朽化の家屋は取り壊し、空き地が多くなり、知人・幼友達・学友もいなくなり、歩きながら他人行儀のような町に変わってしまったが、まだまだ船頭町の面影はあちこちに残っている。

私にとって船頭町は心のふるさと！たぐさんの思い出が温かくよみがえってくる幸せを感じている。



もと山城散髪やさんの家。外観はもとのまま。右側の空地は菊池のおばあさんの家跡。

地名のルーツ

◆魚見・岡見

魚には鯛のように群をなして回遊するものもあります。魚群が入ったかどうか、漁期になれば常に見張っています。その場所は海岸に近い遠見のきく場所が選ばれます。次の「魚見」や「岡見」は魚群の見張所です。

南海部郡米水津村大字宮野浦字魚見

〃 鶴見町大字大島字チカミ

〃 上浦町大字津井浦字岡見

〃 大字最勝海浦字チカミ

◆破磯・波戸・船付

重いものを遠くに運ぶのは、陸上よりも水上交通が長いこと利用されました。特にリアス式海岸の県南では、現在でも船が重要な役割を担っています。したがって、水上交通関係の地名は特に県南の海岸に多く見えます。最も多い地名は船着場で、「破磯」「波戸」「船付」などがあります。

南海部郡米水津村大字宮野浦字波戸

〃 上浦町大字最勝海浦字波戸ノ口

〃 蒲江町大字楠本浦字船付

〔『地名覚書』染矢多喜男〕